寺田寅彦と河東碧梧桐（かわひがしへきごとう）の親和性

四宮義正

はじめに

河東碧梧桐（明治 6 年～昭和 12 年）は、高浜虚子（明治 7 年～昭和 34 年）とともに正岡子規門下の双璧といわれるが、やや影が薄いようにも感じられる。石川九楊は「近代の大文豪、大文学者として知られるべき河東碧梧桐が、せいぜい俳人、否、自由律俳人の祖という肩書程度しか知られていないのは、「写生」を徹底し、俳句を近代的表現に引き上げんとつきつめて行った碧梧桐の仕事に目を掩う定型俳人達の敬遠と無視、作品はもとより存在すら触れないでおこうとする俳壇の営為にある。碧梧桐は近代･現代の俳壇によって、消しゴムでゴシゴシと消されていったのだ。」と書いている。(「はじめに」『俳句の臨界　河東碧梧桐一〇九句選』2022 年、左右社)

ここでは、寺田寅彦と河東碧梧桐の親和性について少しばかり書いてみたい。

１.『新俳句』について

寺田寅彦は「俳諧瑣談　七」で碧梧桐の俳句について書いている。引用してみる。

> 高等学校の一年から二年に進級した夏休みに初めて俳句というものに食いついて、夢中になって「新俳句」を読みふけった。天地万象がそれまでとはまるでちがった姿と意味をもって眼前に広がるような気がした。
>
> 蒸し暑い夕風の縁側で父を相手に宣教師のようなあつかましさをもって「新俳句」の勝手なページをあけては朗読の押し売りをしたが、父のほうではいっこう感心してくれなかった。たとえば
>
> 古井戸をのぞけばわっと鳴く蚊かな　　杜昌（としょう）
>
> といったような句でも、当時の自分には、いくら説明したくても説明のできない幻想の泉となり、不可思議な神秘の世界をのぞく窓となるのであったが、父に言わせると「ただ、言っただけではないか」というのであった。
>
> そのころより少し前に、父は陸軍の同僚数名と連句の会をやっていたことがある。その同僚中に一人宗匠格の人があってそれが指導者になっていたらしい。その宗匠が「扇開けば薄墨の月」という付け句をしたのを、さすが宗匠はうまいと言ってひどく感心していたことを思い出すのである。前句は何であったか忘れてしまった。
>
> 「赤い椿白い椿と落ちにけり」（碧梧桐）でも父の説に従えばなるほど「言うただけ」である。しかしこの句が若かった当時の自分の幻想の中に天に沖（ちゅう）する赤白の炎となってもえ上がったことも事実である。　　（昭和九年三月、俳句研究）

ここに出てくる「新俳句」は書籍の題名で『新俳句』（明治 31 年 3 月 16 日、民友社）のことである。書誌的には正岡子規閲、上原三川・直野碧玲瓏共編、となっている。

巻頭に獺祭書屋主人（正岡子規）の「『新俳句』のはじめに題す」がある。栗田靖『河東碧梧桐の基礎的研究』（2000 年、翰林書房）によれば、作者 600 余名、総句数 4,857 句と

のことである。入集句数が多いのは子規 519 句、碧梧桐 281 句、虚子 228 句などとのこと。漱石も 79 句が掲載されている。（漱石は筆者が数えたので誤差があるかもしれない。）

やはり漱石を介してこの本を知ったのであろう。しかし漱石よりも碧梧桐に共感しているのは面白いところである。

時期的なことを考えてみると、「高等学校の一年から二年に進級した夏休み」は明治 30 年である。しかし『新俳句』の発行は明治 31 年 3 月だから、「初めて俳句というものに食いつい」たのは明治 30 年の夏休みだとしても、「新俳句」を読んだのは、2 年から 3 年に進級した夏休み（つまり明治 31 年）ということだろう。

『新俳句』表紙
（明治 31 年、民友社）

河東碧梧桐は明治 6（1873）年 2 月 26 日、愛媛県温泉郡千石町生まれ。本名秉五郎（へいごろう）、昭和 12（1937）年 2 月 1 日逝去。寅彦より 5 年余り先に生まれ、約 1 年遅く亡くなった、ということである。

なお、漱石の句に「梅散つてそゞろなつかしむ新俳句」がある。

２．「赤い椿白い椿と落ちにけり」について

初出は明治 29 年 3 月 11 日、新聞『日本』である。この時は「白い椿赤い椿と落ちにけり」だった。子規の添削で、本人の作とは逆になって掲載されたようだ。

子規は、新聞『日本』に獺祭書屋主人の筆名で連載した「明治二十九年の俳諧」（三）（明治 30 年 1 月 4 日）で碧梧桐を取り上げている。文言を転記する。（旧漢字を変更したところがある。）

> 碧梧桐の特色とすべき処は極めて印象の明瞭なる句を作るに在り。印象明瞭とは其句を誦する者をして眼前に実物実景を観るが如く感ぜしむるを謂ふ。故に其人を感ぜしむる処、恰も写生的絵画の小幅を見ると略同じ。同じく十七八字の俳句なり而して特に其印象をして明瞭ならしめんとせば其詠ずる事物は純客観にして且つ客観中小景を擇（えら）ばざるべからず。

次に、例として「赤い椿白い椿と落ちにけり」を含む 8 句を挙げて、続ける。

> 椿の句の如き之を小幅の油画に写しなば只地上に落ちたる白花の一団と赤花の一団とを並べて画けば即ち足れり。蓋し此句を見て感ずる所実に此だけに過ぎざるなり。椿の樹が如何に繁茂し如何なる形を成したるか又其場所は庭園なるか山路なるか等の連想に付きては此句が毫も吾人に告ぐる所あらざるなり。吾人も亦之無きがために不満足を感ぜずして只紅白二団の花を眼前に観るが如く感ずる処に満足するなり。

今では碧梧桐の代表句の一つとされているこの句について、寅彦が相当に入れ込んでいることから、漱石のいう始めから俳句がうまい人だったのがよく分かると思う。

また、栗田靖によれば、この句には 2 種類の解釈があるという。

A　落ちている椿の花を詠んだ。（先の正岡子規の評や高浜虚子、大岡信など。）
B　落ちつつある椿の花を詠んだ。（山口青邨、山本健吉、栗田靖など。）

栗田靖の解説を引用する。（要部）

椿の句の「落ちにけり」も「落ち敷いているさま」というような静止の状態を詠んだものではなく、赤い椿が落ちてはっとする間もなく白い椿が落ちたことに感動しているのである。つまり、作者は赤い椿の花がぽたりと落ちたことに対し、アッと驚き、その驚きが消えない間に今度は白い椿がぽたりと落ちたのである。椿の生命を極めて即物的、印象鮮明に捉えたところにこの句の生命がある。

この解釈を読むと寺田寅彦・松根豊次郎・小宮豊隆『漱石俳句研究』（大正 14 年、岩波書店）で「落ちさまに虻を伏せたる椿哉」に関して三様の解釈がでてくる因縁を思う。珍しく寅日子から口火を切り、この句に対する思い入れを熱く語ったあとに続く。

松根東洋城　…そこで問題になるのは、虻は何処に居るかという事だ。椿が落ちながらそこに飛んでいる虻を伏せながら地上に落ちた、とも取れるが、そう取れば甚だ際どい句になり過ぎる。寧ろ僕は、途中で虻をふせなくても、椿の花がまだ落ちない前即ち枝についている時から虻はあの深い穴の中で蕋を吸って居、夢中になって吸っている其の間に、椿の花は下向きになりつつ落ちて行って、とうとう地上に着く時分には虻を一緒に伏せ込んで了った、ととりたい。…

寺田寅日子　夫以外の考え方は impossible だと思う。虻の執拗なことがよく現われているのである。

小宮蓬里雨　…椿の樹のある下の草原か何かに虻がのろくさして居て、落ちて来た椿の花に伏せられたものだと思っていました。…

寺田寅日子　possible ではあるがプロバビリティは少ない。

（注：仮名遣いなど変更した。）

絵画のような静的な情景としての捉えかたと動画のように動きを表現しているとする二つの説がある。作者の意図はどうだったか、碧梧桐や漱石に尋ねてみたいものである。

３．「方則」のこと

寅彦の作品に「方則について」がある。初出は『理学界』（大正 4 年 10 月 1 日）。このように、一般的に「法則」と書くところを「方則」と書いた。作品を調べてみると、例外的に、「熱力学第二法則」「基礎法則」「音韻法則」の 3 例があるが「方則」は約 250 カ所に使われていた。

正津勉『忘れられた俳人　河東碧梧桐』（2012 年、平凡社）は碧梧桐を俳人としてではなく、紀行家・登山家として捉えて、碧梧桐の「三千里」（明治 39 年 8 月 6 日～40 年 12 月 13 日の 1 年と 128 日）と「続三千里」（明治 42 年 4 月 24 日～44 年 7 月 13 日の 2 年と 81 日）の旅を追っているが、宇和島での「続一日一信」（『続三千里』）から引用した文を下に示す。

宇和島　明治四十三年九月十六日

古人以外に方則を作って、それが泡沫的に消滅せぬような勢力を附与するのでなければ、詩人としての価値はゼロである。我々はその方則を作る、……。今日の一句、今の一言が千年後をも支配する使命を伝うるものとならねばならぬのではないか、と。

寅彦は「方則」を使用する理由について書き残してはいないが、碧梧桐と共通する意識があるのかもしれない。

４.「関東大震災」の記録

寅彦の「震災日記より」はいろいろな所で引用・紹介されているが碧梧桐にも震災の記録がある。9 月 1 日から 9 日以降までの詳しい日記である。石川九楊は「災害の町の風景と人々の人事を活写する「大震災日記」の筆は、記録映像でもあるかのように冴えわたる随一の関東大震災の記録である。」と書いている。(「はじめに」『俳句の臨界』)

「大震災日記」(『河東碧梧桐全集』第 12 巻、平成 19 年、短詩人連盟）からごく一部を引用する。自宅で地図を書き写していた時に地震が発生したのである。

九月一日

（略）うつむいてゐた頭を持ち上げて、膝を坐り直さうとした時に、グス／＼と膝を持ちあげる震動を感じた。地震だといふのと同時に、又たいつものことか、と言つた気にもとめない気持で、落着いた視線を地図から放さうとしなかつた。今一つ二つ地名を書き加へたい紙が波打つて踊り出した。ペンを持つて往きやうのない手で長火鉢を掴んだ。全身が揉まれる動揺になつた。いつもと違つて、少し猛烈に来ると思つた時分には、もう何の音ともつかない耳の底鳴りのする雑音の中に、敷居と柱の食ひちがふギシ／＼摺れる音が際立つて響いてゐた。いきなり頭の上へ鴨居の壁が落ちかゝつた。私は壁が落ちた、と自分の意識を強ひるやうに心の中で叫んだ。壁が落ちるまでは、地震の時家の外へ飛び出すものでない、と言つた対地震の用意が平生私を支配してゐたからだ。明治二十七、八年頃、本郷の下宿で、始めて可なりの強震に揺られた時、階子段をずる／＼すべり落ちた醜体を演じて以来、地震であはてふためくのは愚かなことだ、とそれから右の用意を深く心の中に刻みつけたのだ。が、今眼前に、亀裂が入るとかぐら／＼に舞竹から離れるとかいふ予備行為もなしに、いきなり壁が落ちて来たのだ。私はそれを無関心に見過ごす事は出来なかった。気のついた時、私は同じ場所に立つてゐた。柱につかまつてゐなければ、立つてはをれなかつた。震動は刻々に強度を増して往つた。新築の六畳と八畳の波打つてゐる鴨居を見てゐると、もう今にどちらかに潰れるとしか思はれない。何だか土埃りが濛々と立つ、襖や障子が倒れる、物をドヤシつける鈍い音の中に、ガラスの破れる鋭い響きが耳をつきぬける。私は其の一切の事を考へる余裕もなく、この家が潰れるか潰れないかを見極めようとするものゝやうに、ぢつと右左にかしぐ鴨居を睨んでゐた。

……

近所の荒物屋へ蝋燭を買ひに行く。これはいかゞです、と握り太い百目蝋燭を出した。

一本六十銭だといふ。この一本の百目蝋燭が、電灯のつかなかつた一週間の晩餐の食卓上にどれほど有難い光を投げたか、震災の買物の中の偉勲に相当するものだつた。（略）

九月二日

（略）ゆうべは〇〇〇が放火するとか、焼け残つた方面へ来襲するとか言つて、四中の避難者は、いろ／＼な恐ろしい話をして慄へてゐたさうだ。或る〇〇〇の持つてゐた革包を調べると、キヤラメルを詰めた下側にはいろんな薬品が詰めてあつた、ダイナマイトを懐中してゐたのが破裂して死んだ、どこそこへは爆弾を投げ込んだ、井戸へ毒を投げ込むのもある。或る町ではもう十人〇〇を斬つた、そんな話が避難者の口利きや、慰問の青年団員の土産話で尽きなかつた。四中に避難してゐると、どう落着いてをらうとしても、知らぬ間に神経過敏になる、と姉は言つた。そんな非常識な無駄話をきかなかかつたゞけでも、私は僥倖をしたのだ。

……

私は神楽坂警察の貼り紙にあつた、今後恐るべき激震はない、と中央気象台の報告を楯に争つたが、家人は、さつき憲兵が今夜の七時と十一時と、明日の午前一時とに大震があると報告した、と言つてきかなかつた。私は平常の通り晩酌をすまして寝た。子供がなぜお父さんも逃げないか、と泣いたりした。家人は一時半頃まで外にゐたさうだが、結局無事だつたのに飽いて家に入つたさうだ。（略）

（注：／＼は繰り返し、〇〇は最初からの伏せ字、四中は近くの第四中学）

碧梧桐は牛込加賀町一ノ九に住んでいた。現在の新宿区市谷加賀町 1 丁目あたり、大日本印刷（元・秀英舎）があるところである。文中に「秀英社の表煉瓦の大破したのを瞥見（べっけん）して、左内坂を下りて市ケ谷見附に出ると、そこは総てが戦場気分だった。」とある。自宅は倒壊しなかったが壁が落ち、家財道具が倒れてめちゃめちゃになるなど被害があった。火災はここまで来なかった。9 月 2 日には、本所被服廠での火災について、生々しい聞き書きを記録しているが、省略した。9 月 7 日には一部の電車も動いていたようで、子規庵へ行ったところ、避難してきている陸羯南の未亡人などの家族に会っている。9 日まで、被害状況を見て回ったことが書かれているが、地図がないと分かりにくい。Web サイト「空をはさむ蟹～子規門下雑記帳～」に関連の詳しい地図が出ている。

震災雑詠十八句から

松葉牡丹のむき出しな茎がよれて倒れて

一方の寅彦は、大正 12 年 9 月 17 日の日記に書いている。

午後二時過より今村氏、安田君、水沢の助手某氏と四人自動車にて焼跡視察、浅草観音周囲の焼け留まりの状況を精査、それより今戸橋場の焼け残り地より白鬚橋元瓦斯会社横より吉原に入り池中惨死の跡を実見す。泥土中の衣服に交りて頭髪の束の残れるもの最も酸鼻の感あり、焼却せる遺骨を木箱数個に満たせるものを仮の祠に入れ蠟燭や香火を具へたり、西洋人一名活動写真にて此の小祠を撮影せり　秋空に秋の雲

泛び夕陽雲間より白光を放射せり、美しき空の下に焦土茫漠として連なる遥にオーシスの如き観音の森を望む。

大震災の被害を視察していても、詩人の心がある。これが寅彦日記を読む楽しみだと思う。

５．コーヒーがテーマの随筆

ともにコーヒーに関する文章がある。碧梧桐は単純に「コーヒー」で、大正 13 年作の小文である。全文を転記してみる。

銀座を散歩すると、私はいつでも資生堂のカフエーで一休みします。こゝのコーヒーを飲む為めです。香気、色、味、附属したミルク、それらが嘗てローマで飲んだコーヒーのそれを聯想せしめるからです。

ローマでコーヒーを飲む場合は、大抵もう用のなくなつた、七時半の夕飯の時間を待つ時でした。腹も空いてゐました、何だかがつかりしたやうに草臥れてゐました。椅子に腰を下ろしながら、重くるしい鎖につながれたやうな足を感じてゐました。畳の上へ大の字なりに転びたいやうなわた／＼になつた身体を丸テーブルに凭せてゐました。まはりのローマ人が饒舌におしやべりをしてゐる程、たゞ孤独にとり残された自分自身の姿が、はつきりと眼に映つてゐました。

資生堂でコーヒーを飲むのは、ローマの匂ひを想ひ起す追憶ではないのです。其の当時の孤独の淋しいやるせない、涙をさそふやうな寂寞味を新たにしたいが為めなのです。恋人を失つた淋しさ、老を感ずる淋しさ、そのやうな淋しさとは別な、心の奥の方に秘められてゐる、穏やかではあるが、痛切な涙の泉をぢつと噛みしめるやうに味つてゐる心境は、私にとつて悲劇的な快さであるのです。

碧梧桐は大正 10 年のほぼ 1 年間ヨーロッパ巡遊していて、ローマにも立ち寄っている。追憶ではないと書いているが、大正 12 年の関東大震災が作用しているのかもしれない。

一方の寅彦には「珈琲哲学序説」がある。昭和 8 年の作で、コーヒーをめぐる人生記録の面があるが、明治 42 年～44 年のヨーロッパ留学時のコーヒーの思い出もたくさん出てくる。一部を引用する。

ベルリンの下宿はノーレンドルフの辻に近いガイスベルク街にあって、年老いた主婦は陸軍将官の未亡人であった。ひどく威張った婆さんであったが珈琲は好い珈琲をのませてくれた。ここの二階で毎朝寝衣のままで窓前に聳ゆるガスアンシュタルトの円塔をながめながら婢のヘルミーナの持って来る熱いコーヒーを飲み香ばしいシュニッペルを齧った。一般にベルリンのコーヒーとパンは周知のごとくうまいものである。

帰国後は、やはり銀座へコーヒーを飲みに出かけている。二人にとって、ローマやベルリンの懐かしい味わいは、やはり銀座しかなかったということなのだろう。

６．俳句の共感性

『寺田寅彦全集』には俳句 1,397 句が掲載されている。一方、『河東碧梧桐全集』第 1～3 巻には類似句を除外した 14,842 句が載っている。時代が重なっていることもあるし、似たような句があってもおかしくはないが、あえて対にしてみた。なんとなく親和性が感じられるのは私だけだろうか。

碧梧桐　砂の中に海鼠の氷る小さゝよ　　明治 26
寅日子　人間の海鼠となりて冬籠る　　明治 33

碧　午過の火燵塞ぎぬ夫の留守　　明治 32 年
　　亡き人の向ひをるよな火燵かな　　明治 39 年
　　子供に火燵してやれさういふな　　大正 6

寅　火燵してアルバムを見る女哉　　明治 31～32 年
　　今そこに居たかと思ふ火燵哉　　大正 6 年
　　母なき子の父に親しむ炬燵哉　　大正 6 年

碧　遠花火音して何もなかりけり　　明治 29
寅　やゝありてぽんと鳴りけり遠花火　　明治 31～32 年

碧　それとなく風に裏ある若葉哉　　明治 25
寅　まざまざと夢のにげ行く若葉哉　　昭和 9

碧　から松は淋しき木なり赤蜻蛉　　明治 35
寅　蝉鳴くや松の梢に千曲川　　昭和 9

碧　パン屋が出来た葉桜の午の風渡る　　大正 13
寅　連翹や垣のうしろに残る闇　　昭和 9

主な参考文献

○石川九楊『河東碧梧桐　表現の永続革命』（2019 年 9 月 19 日、文藝春秋）
○石川九楊『俳句の臨界　河東碧梧桐一〇九句選』（2022 年 2 月 28 日、左右社）
○Web サイト　松本隆行　向山型国語に挑戦 33「赤い椿白い椿と落ちにけり」（河東碧梧桐）2006 年 7 月 29 日
○栗田靖『河東碧梧桐の基礎的研究』（2000 年 2 月 21 日、翰林書房）
○寺田寅彦・松根豊次郎・小宮豊隆『漱石俳句研究』（大正 14 年 7 月 5 日、岩波書店）
○正津勉『忘れられた俳人　河東碧梧桐』（2012 年 7 月 13 日、平凡社）
○『河東碧梧桐全集』第 12 巻（平成 19 年 1 月 15 日、短詩人連盟）
○Web サイト　空をはさむ蟹　くうをはさむかに～子規門下雑記帳～　20200901～20200913
○河東碧梧桐「コーヒー」（『二重生活』大正 13 年 10 月 18 日、改造社）
○日本現代文学全集 25『高濱虚子・河東碧梧桐集』（増補改訂版、昭和 55 年 5 月 26 日、講談社）